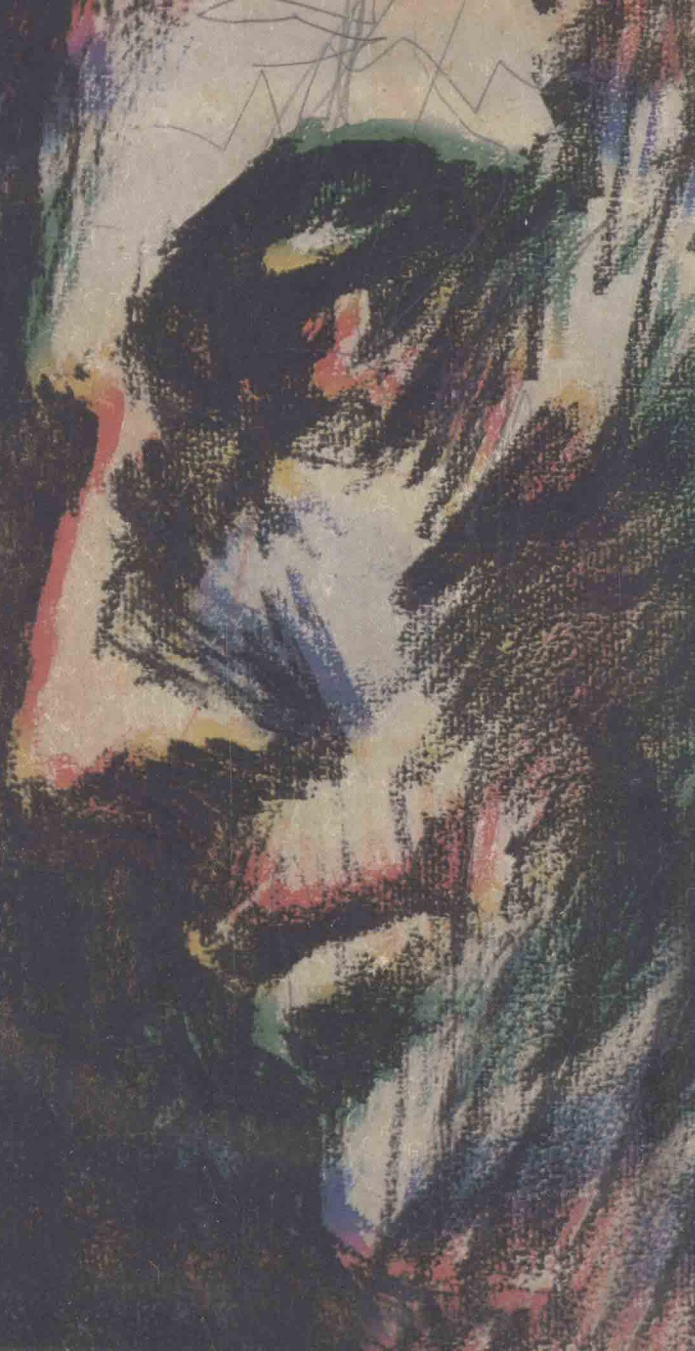
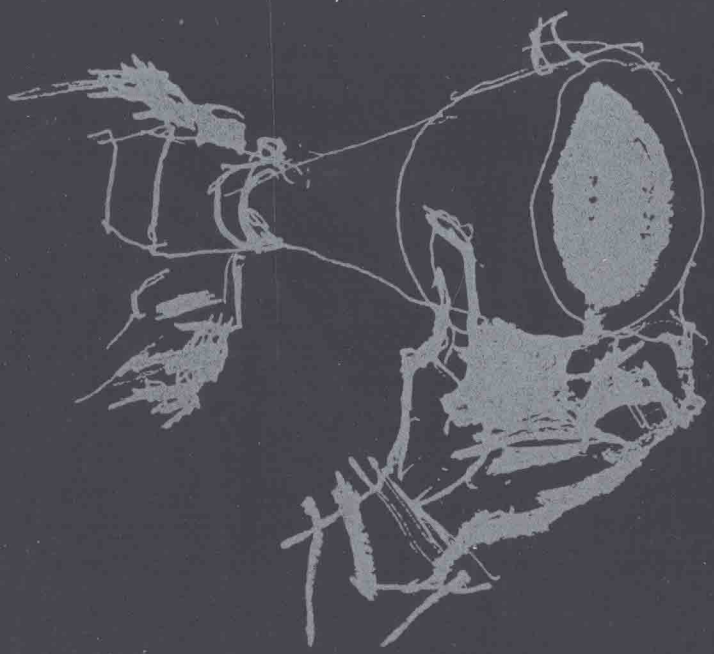
黒い環

石原慎太郎



黒い環

石原慎太郎



河出書房

黒い環（くろわ）
©1967＝定価350円
昭和42年2月20日初版印刷／昭和42年2月27日初版発行
著者 石原慎太郎　発行者 河出朋久　印刷者 堀内文治郎　装幀者 市川英夫（デザイン）山根隆（イラスト）長岡宏（カメラ）
発行所 株式会社 河出書房新社 東京都千代田区神田小川町3丁目6番地　振替口座東京10802番
印刷・堀内印刷　製本・中西製本　落丁・乱丁の場合はお取替いたします

目次

聖人（セイント） 7
賊 12
コンタクト 17
戦友 24
登場 33
弾痕 44
貸ビル 48
戸倉 56
地下壕 62
カフス釦 65

かえだま——73
同窓生——83
図面——89
船客——93
船底の手首——99
香港——105
忠告——111
誘拐——116
護衛——122
スクーナー——127

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ヨットクラブ——132
阿片窟——139
裸美人——143
窓の中——148
スパイ?——154
再び忠告——159
マカオ——164
ダンカン——171
破れ修道院——174
侵入——181

尋問 189
水爆 194
ロドリゴ 199
筆談 208
脱出 213
不時着 219
帰国 225
地震研究所員 231
宝庫 237
埋葬 243

黒い環

聖人（セイント）

その男の右頬骨の上から耳にかけて古い傷の跡がある。古いが大きな傷跡だ。

彼が何か強い感情を抱くと、その傷跡の色が変る。強い感情、といっても怒るだけではなく、緊張したり、いらいらしたり、そしてあるいはまた、極めて美しい魅力的な女を眺めた時など。

ただし、彼が女に強く心を動かすということは滅多にない。それは多分、彼の仕事のせいだろうが。といっても、それは、彼が女をベッドの中で愛さない、ということではない。彼は女を愛する。他の男たちと比べて、甚だ数多く、甚だ熱心で、そして上手に。それも自分のベッドの中だけではなく、他人のベッドの中でも、あるいは車の中でも、上には空しかない家の外でも、また、仕事場の床の上でもだ。

女たちは、その男に必ずその右頬の傷の訳を訊ねる。

彼が答えることはいつも出まかせの嘘だ。以前、外国のある所で誰かと、それも女のことで、決闘をした名残りであるとか、ギャング仲間にいた時の出入りのせいだとか、仕事で出かけていった外国の事件、戦場での巻き添えでとか、あるいは彼の捨てた女に斬られたとか。

言いながら彼はいつでもその傷跡を撫でてみせる。その時だけ、彼の眼は必ず、今までと変った影を浮かべる。その眼が、何を見つめているか、女たちにも、誰にもわからない。

その傷に触れながら彼の感じるものは、懐旧だろうか、怖れだろうか、あるいは虚しさか。それは彼自身にも定かでないのだ。

いつか、彼と長くつづいたある女が、彼女のために、その見る角度によっては、凶悪な、無気味にも見える傷跡をとり去るように頼んだことがある。女はある所で頬にある傷のために、彼の素性について蔭口をたたかれたことがある。確かに近頃のすすんだ整形医術では、その傷跡を旨くとり去ってしまうことも出来ただろう。

が、彼は聞きいれなかった。

女はしつこくせがみ、二人はそれで言い争い、女は怒った。言い争ううち女には、男がその傷を彼女自身よりも不可分に、愛しているようにも聞えたからだ。

彼女はそれを訊き質（ただ）した。

「お前さんと、この傷のどっちをだって？」

彼は相手を見直し、最初悪戯っぽく、やがて皮肉に、傷に

触れ直しながら、急に険しい微笑を浮べてみせた。
「そりゃあ、この傷だよ」
「なぜよ」
女は咎めて質した。
「こいつは、つまり、この俺自身だからな」
嘯くように言うと彼は横を向いた。有無を言わせないものがあった。
確かに、その傷に触れる度、彼は、今までにないもう一人別の自分を感じるような気がするのだ。
そのもう一人の自分を、彼は知らぬ間にどこかへ置き忘れてきたような気がするのだ。
そう思う度、そのもう一人の自分は、懐かしく、また、それだけが自分にとってほんとのものに思えた。そして今の自分が虚しくもあった。
もう一人の自分に繋がる記憶は、彼に忘れているものを思い出させる。生と死。足音を立て、秒を刻んでせまってくる死の影。いや、はっきりとこの眼で見、触れて感じ、そして、何故か過ぎ去っていった彼自身の死。
今でも夢に見る。生唾を呑み、歯を食いしばり、膝をしめつけ、手を握りしめながら自らの死に向ってつき進んでいった自分のことを。同じように出発し、彼のようには生きて還らなかった、数多くの、真実の仲間、本ものの友人たちの姿を。
あの記憶に比べれば、今、彼が生きているこの現実の生活なんぞ、泡のようなものだ。
熱中している仕事の途中のある一瞬、突然、自失したように彼はそう感じることがある。すると、どのように色濃くにぎやかに飾られていても、眼の前のすべてのものが、虚しく灰色に見えてくるのだ。
彼は手にし、触っていたものから眼を離して見直して見る。見直しても同じだ。
「止めだ」
吐き出すように彼は助手に言う。なれた助手はあきらめたように頷く。彼が虚しい灰色と感じたものが、裸の女だった場合、女は一層不安そうに彼を見返す。
「先生？」
「止めだよ。気が向かないのだ」
助手は気をきかせたように、仕事場を出ていき、彼はどうしていいかわからず、見返している相手に近づいて、黙って手をのべ、彼女を抱いてみる。手にしたものが、彼を、今突然感じた、その灰色の世界から元に引き戻してくれるのを期待しながら。
彼の商売はカメラマンだ。プロカメラマンにもいろいろな奴がいる。値の張るカメラをぶら下げ、したり顔に、大きな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

望遠レンズをつけたり外したりすれば、他人はプロと思うかも知らないが、そんな小僧から、低級な日本画の出来損いみたいな写真を年に数枚とってみせるだけで先生と言われている半毫碌(もうろく)まで。

しかし彼は本ものだ。彼のカメラは、生きている人間、いや、生きようとしている人間の眼だ。

彼は人間しか撮らない。毛色のいろいろ違った、裸の女から、内乱や、戦争で射ち殺され、焼き殺されていく人間まで、そして、彼が写し出す人間たちは、誰の眼にも強い感動と共感をひきださずにはおかない。

彼が、カメラマンとしての檜(ひのき)舞台であるタイムライフ、パリマッチに載せた中南米、東南アジアの戦争の写真を見て、ピカソが、あれは現代の聖画だと言った。

彼の画の中に写し出された、生死をさまよう人間たちは、写真の中ではすでに、神の清らかさ、神の無惨さを与えられているのだ。たとえそれが、腕を千切られて泣き叫ぶ、兵士の写真であろうとも。

「その通りだ。写真をとる俺が聖人だからな」

彼はいつかそう答えた。以来、人は、いやあるいは彼自らが、自分のことをセイントという称号で呼ぶ。セイント宮城。宮城隆男。それが彼の名だ。

どこの国のジャーナリズムでも、彼はただ、セイントで通じる。仕事の注文はフォークリフトで持ち上げ運び切れぬほど沢山あった。その中から、好きなものだけを選んで撮る。

ライフの編集長が、彼がとったイラン内乱のある写真の一部をトリムしカットすると言い張った時、彼は相手の眼の前でその引き伸し写真と、たった今受けとった契約の二万ドルの小切手を引き裂いて捨て部屋を出ていった。結局、相手はエレベーターまで彼を追いかけ、泣いて頭を下げ、彼の言う通りに話をつけた。

「何がセイントだ。奴はギャングだ」

と後で編集長は言ったそうだ。

彼が自分をセイントと呼んではばからぬ訳はある。彼はかつて一度死んだことのある人間だ。二十年前、彼の顔にあの傷が刻まれた時、彼は一度死んだのだ。

彼の操縦した飛行機は、離陸直後、片側のエンジンが爆発し、その衝撃で失速して、飛行場外れの畠に墜落した。地上へ衝突の寸前機をたて直しはしたが、それは不時着というより、やはり墜落だった。

飛行機は四散し、彼は機の外へ放り出され、畠の上に叩きつけられた。奇蹟のように、骨折も大怪我もなかった。ただ一つ。宙に舞い上って落ちた翼の破片が、彼の顔をかすめ右頬を裂いたのだ。明るい初夏の午後、本土の最南端に近い、鹿屋(かのや)の特攻基地での出来事だった。

そんな事故で怪我をしなくとも彼は死ににいくためにそこを飛び立ったのだが。彼と一緒に飛び発った、七人の僚友は、その日の午後遅く、沖縄の海で死んだ。

その頃、そこには、短いものは二十に満たない、自分の人生を自分の手で終らせて死んでいく筈の若ものたちが数十人いた。彼もその一人だった。

軍医は、裂けた彼の顔を乱暴に縫った。

「どうせすぐに死ぬんだ。地獄の閻魔を驚かすような顔にしたててやるぞ」

軍医は言った。

仲間や部下に先だたれ、彼は死に急いでいた。一旦死地に向って出発した彼の身柄は、すでに戦死として公報され、後はもう死人の扱いだった。

基地の司令部は、そんな彼を、いわば厄介もの扱いとして事故から一週間目、まだ打身にうずく体に無理させ強引に出発させた。彼もそう望んだ。しかし、廃機寸前の特攻機は、大隅半島をすぎ、海に出ぬ前に不調を来し、彼ともう一機が基地へ還った。

彼を待っていたのは、卑怯ものの死に損いという汚名と白い眼でしかなかった。

彼は黙ってそれに耐えた。外聞のためにも司令部は彼の外出を禁じ、彼は次の特攻発令まで、歯を食いしばってそれに耐えた。

ある日、一人だけ彼に同情していた当番兵が町で聞いた噂を彼に伝えた。以前基地に奉仕に来ていた女学生の一人高柳明子が首をくくって自殺したというのだ。そしてその遺書に彼の名があった。明子は、死んでいった彼の後を追って自ら命を断ったのだった。そして、彼女の遺族も町の人々も、その彼が二度も生きて還って来ていることを知らずにいた。

町では、彼女が妊娠していたらしい、という噂もあった。

彼は、暗い、獄舎に似た兵舎で、黙ってそれを聞いていた。閉じた眼の中に、町への外出の帰り、途中まで送って来た川の堤の草むらで、たった一度彼に向ってすべてを許した、彼女の可憐な白い肌が浮んできた。

その夜から一層、待ち望む死は、彼にとって甘美なものになっていったのだ。一刻も早く、周囲の白い眼、蔭口を逃れて、彼は国のため、誰のためではなく、何よりも、自分のために死にたい、と願った。

三度目の出撃が来た。唇を固く結んだまま、彼は柩となる飛行機に乗り込んだ。機が無事に離陸した時、彼は操縦席のガラスの前方に、自分をしたう明子の姿を見た、と思った。

そして、彼にとって三度目の悲惨な出来事は、飛行機が屋久島に並ぶ、口永良部島をすぎようとした時に起った。それまでずっと動いていたエンジンが、また突然に停ったのだ。

そのまま突っ込み自爆しようか、と思った時、幻ではあったが、前よりもはっきりと、明子の姿を見た。明子は彼に向って微笑み、いけない、とさとすように首をふっていた。

機首を下げた彼の飛行機は、島の近くの海上に、奇蹟的に不時着した。沈む飛行機から飛び出した彼を助けに、事故を見た島の僅かな住民が、舟を出した。

着水の時の打撲傷が癒った時、彼はこの孤島から、何とかもう一度、鹿屋の基地へ、死ぬために戻ろうと願った。電話も無線もない孤島からは、事故の報告も送られていない。島にある小舟では九洲までの海を渡ることは覚束なかった。

が、熱心に基地送還を願う彼に感激した、英蔵という、漁師の伜の十六の少年が彼のために決死の船を出してくれたのだ。小舟に帆をはって、二人交替で寝ずに漕ぎ、三日三晩かかって、佐多岬までたどりついた。

そして、岬に近い大泊の町で彼が聞いたのは、終戦の詔勅だった。思いがけない事実を知った時、彼は疲労と絶望で気を失って倒れた。

体が回復し、世話になった民家と、英蔵少年に別れ、敗戦の日から十日滞在して彼はようやく鹿屋の町まで帰った。

敗戦という、思いもよらぬ出来事に自失した人々には、還って来た彼の姿は幽霊としか映らなかった。彼がそこで見たものは、訪ねあてた寺の境内に立てられた、高柳明子の、白く新しい墓標だけだった。

夏のめくるめく太陽の下で、白木の墓標を眺めながら、すべてのことが白日夢のように思われた。彼がかつて、一度本当に死んだのは、明子の墓の前に立った瞬間だったかも知れない。

人々は尚、還って来た彼のことを卑怯と言うだろうか。

かつて、若い日に、彼が背負ったものは、彼一人、俺一人にしかわからない。明子は死んでしまった。そして、俺はたった一人きりだった。俺があの時味わった、底のない虚しさが、他の誰にわかってたまるか。

そうだ、彼は、俺だ。俺がセイントだ。いや、そうではない。本もののセイントは、正確には、もう一人の俺のことだ。ここにこうして、昨夜撮したフランスのダンサーと一緒に素っ裸で寝くたびれている俺のことじゃない。

この女も、昨夜俺の顔の傷跡をつついて接吻した。以前、私のために決闘した男たちがいたわ、と彼女は言った。

長いか短いかわからぬが、これが俺の自己紹介だ。それ以外、俺について自分で話すべきことは何もない。俺は、セイント宮城というカメラマンだ。セイントというのは、聖人のように我ままに、手前勝手に生きる男という意味だ。そう思ってもらえば、まず、間違いはない。

枕元の電話が鳴った。俺と、大柄な割に柄にもなく、ニネットなどという名の女は、朝食の前、ベッドの中でしかけていた仕事があった。この仕事に関して彼女は、舞台で見る以上に、芸術家だった。

受話器をとろうとする俺の手を、ニネットは、遮るようにぴしゃりと叩いた。それはそうだ。どこからかは知らぬが、電話で話すより、今の仕事をつづけていた方がいい。

電話は鳴っていたが、やがてあきらめたように止んだ。女は満足そうに俺に頷き眼をつむった。

ところが、また電話が鳴り出した。待ってはいられないというように前よりもけたたましく。

賊

ニネットは、鳴っている電話のベルの音から逃れるように仰向いたまま体をのけぞらした。あるいはもう、彼女にはベルの音なんぞ聞えなくなっているのかも知れない。女という奴は勝手なものだ。自分の都合のいいように、つんぼにもなり盲にもなる。特に、男とさし向い二人切りでする仕事の最中はだ。

電話はまだ鳴ってはいた。畜生奴、グラハム・ベルなどという男に勲章をやった奴の顔が見たい。この世に電話というしろものがなかったら、どれだけ気が休まるか。

俺の気持を察してか、ニネットは眼をつむったままいやいやをし、のけぞったまま両腕をのばし体を抱きしめるようにからませた。そのはずみに腕の合い間に両の乳房がもり上り、小人の妖精のように薔薇色の乳首が行儀よく二つ並んで立った。

見下しながら俺は右手の指でそれをつまんでみた。全く、受話器なんぞより、この方がずっと触り心地がいい。それに

この角度から眺め直したニネットは、三杯目に突然きいてくるマーティニみたいに、眼を見張らせるほど、男の心を捉えるものがあった。

まったく昨日の午後一杯、俺はこの女のどんな写真をとっていたというのだ。女の体の一番いいアングルなんぞ、ベッドの中で一緒にひと仕事してみなけりゃわかるものじゃない。

寝室に鏡を張る奴の気持はよくわかる。

彼女を見直し、俺は電話に向って耳を塞ぐことにした。が、電話の方でもそれを察したように、音は一層けたたましくなった。月にむら雲とはいうが、電話という奴は得てして、いつもここというかんじんな時に鳴り出すのだ。

根比べに負け、俺はいきなり手をのべ受話器をつかむと、

「うるさい、後にしろ！」

怒鳴って受話器を放り出した。かけている相手が切らずにいたら、そのまま、俺とニネットの室内二重奏がたっぷり聞きとれただろう。俺はいつでも慎しみ深いピアニシモのバスだが、このニネットは最終楽章にはもの凄いフォルテのヴァイオリンになる。

が、受話器が床に落ちた時、その中から、相手が床のすぐ下にいるのではないかと思われるほど、

「いるなら何故早く出ない、こちらは警察だ」

大きな声がした。聞いたことのない声だ。ニネットの肩ごしに受話器を睨みつけ、

「朝っぱらから悪い酒落だぞ」

俺は怒鳴った。

それを何と思い間違えてか、ニネットはからみつけた腕にますます力を入れ、押しつけた部分を尚押しつけながらのけぞった。

「洒落や冗談ではない。こちらは警察だ。君は宮城隆男だな」

声は言った。

「そうだ、俺はセイントだ」

「宮城隆男じゃないのかね」

一体、宮城隆男がセイントだということを知らない奴がこの世の中にいるのか。

しかし案外、警察などという野暮天ならそんな奴もいるかも知れない。とすれば一体、この時間に何の用事だ。

ばれれば警察に挙げられることは幾つもやっている。拳銃こそ持って帰りはしないが、女を五分間で色情狂にしてしまう薬だとか、丁度、俺の分身の太さのブラックジャックだとか、ペルーのお寺で失敬して来た、国外持出し禁止のインカの仏像だとか、そんなものは外国へいく度、毎回土産に持って帰っている。

そんな事ぐらいでないというなら、ドミニカの内乱で、アメリカ軍の火薬庫を吹っ飛ばした革命軍のゲリラを、自動車のトランクにつめこんで運び出してやったのはこの俺だ。
しかし、そんな御用で電話がかかるなら、CIDの方だろう。
ニネットの片腕をほどくと、俺は床に転がった受話器をとり上げた。
「ああ、俺は宮城だがね」
「確かだな」
「そうだよ。あんたは本ものの警察かね」
「そうだ。一体今まで何をしていた」
何をしていたか、いや今も進行形のことを、ことこまかに聞かせてやろうか。聞いたら今日一日中、頭へ血が上って仕事にならないのじゃないか。まったく、テレビ電話がないのが惜しいくらいのものだ。
「風呂に入っていたのさ。朝飯前の朝風呂という奴に。悪かったかね」
相手はむっとしたように黙った。警察官の給料じゃ朝風呂へは入れないのだろう。まして、この栗毛の朝風呂には。
「御用はなんですか」
俺は殊勝に言ってやった。
「君の仕事場に昨夜、賊が入った」
「賊が」
「そう、強盗だ。仕事をしていた助手の、天野君が怪我を負った」
「天野が」
確かに昨夜、助手の天野は俺から言いつけられた仕事をしていたはずだ。
「で、怪我は」
そこまでくると、途中で朝風呂から出た頭と体は完全に醒めた。ニネットは不興気に、それでも、何かただ事ではない気配を察したような顔で、俺と電話を見比べていた。
「まだわからない。殴られ、縛られて気絶していた。ビルの管理人が朝開いていた扉から中を覗いて見つけ、報せて病院へ運んだが、これから精密検査を受ける。すぐ来てもらえるかね」
「いいですよ」
俺は言った。自分の仕事場に強盗が入り、助手が殴られて気絶したのに、ここでこうしている訳にはいかない。
「すぐかね」
「ああ、すぐにね、三十分以内にいきます」
「よろしい。急いでくれ」
「しかし、一体何を盗られたのです。カメラか、あすこに金なんぞ置いちゃいないが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.